

最初期イスラーム史料に見る仏教について ——『チャチュ・ナーメ』中に表れた仏教の記述を中心に——

保 坂 俊 司

I

筆者はここ数年来、インド・イスラーム最古の文献とされ、インドイスラーム研究の基本史料である『チャチュ・ナーメ』を用いて、七～八世紀における西部インド（この場合は、現在のシンド地方からパンジャブの西側一帯であり、現在の西インドではない。）仏教に関する一連の研究を行ってきた¹⁾。

従来、インド仏教研究に殆ど用いられることの無かったイスラーム史料であるが、その豊富さと信憑性の高さを考えると、その史料価値は大きい。

さて、『チャチュ・ナーメ』の史料的価値等の検証については、他の機会に検討したので、本研究では改めて検討しないが、本研究でもインド・イスラーム研究において、一般に認められている『チャチュ・ナーメ』の史料的評価を前提として考察をおこなう。

II

『チャチュ・ナーメ』はその正式名『シンド勝利の書チャチュ・ナーメ』が示すように、シンドとパンジャブ西部一帯が、如何にイスラーム教徒によって征服され、イスラーム教化したかを、後世に伝えるべく書かれた書物である。この書物は753年以前に書かれたことが知られる古い史料である。従って、その中には消滅以前の仏教、および仏教徒に関する記載が、少からず見いだせる。

イスラーム教徒のインド侵略は、早くも635年に、第二代カリフ・オマルの手によってなされたとされる。しかし、余りに犠牲が大きかったために、ウマルは改めてシンド (Sind) とヒンド (Hind) の調査を行い、今後の作戦をたて直そうとする。ところが、その報告には、

その水は濁って (tir) おり、産する果実 (miwa) は毒があり (maqātil), 酸っぱく (tursh), 大地は岩ばかり (sanglak) で、その全体には塩気 (shūr) があります。…中

略。ウスマーンは「彼等は条約 ('ahd) や約束 (vasiq) について、どのようであるか。また誠実さ (vafādād) あるいは不誠実さ (jafā) とはどうか」と尋ねた。それに対して「彼等は、反逆者 (kh'āin) であり、狡猾 (ghaddār) なものたちです」と答えた。(カリフはこの報告を聞き、インド征服を取り止めた)²⁾

この引用は、イスラーム教徒のインド観並びにインド人観をよく表している。特に、インド人に対して、神への反逆者 (kh'āin)、言葉を変えればイスラーム教の無信仰者 (kāfir) と断定していることは、インド人との戦いが聖戦 (jihād) となる。という認識を下したものとして注目される。

しかし、『チャチュ・ナーメ』の記載の細部を検討してゆくと、聖戦のイメージからくる敵対関係だけで、征服者イスラーム教徒と西インドの諸宗教との関係を判断することが、必ずしも正しくないことが知られる。特に、征服者イスラーム教徒に対して、友好的であった仏教徒は、『チャチュ・ナーメ』の中では非常に特異な存在として描かれている。

Ⅲ

『チャチュ・ナーメ』の記載を検討してゆくと、七～八世紀の西インドにおける仏教とヒンドゥー教との確執が明らかになる。また、同時代史料である『大唐西域記』との対照研究などから、この地域の仏教がヒンドゥー教に政治的にも対抗しえる大勢力であったことが明らかとなる。そしてこのことから、仏教の消滅、少なくとも西インド仏教の消滅原因は、従来言われているようなイスラーム教徒の武力弾圧によるというような単純な理由だけではない、ということが明らかとなった³⁾。

最初期のイスラーム教徒と仏教徒との関係は、七一二年イスラーム教徒による本格的な西インド征服の責任者、ムハマド・カーシム (695-714) に関する記述の中に多数みいだせる。特に、その中の代表的な事例をあげるならば、

(ニールン都城征服の後) この都城がムスリムの国土 (mamlkat-i- muslim) になり、(ヒンドゥー教徒の王および支配者の) 要塞が没収された後、(カーシムは) 彼等(ここでは、カーシムに敵対しなかった仏教徒の) 福利 (tarfih) を守り、彼等を安楽 ('ishmt) にさせるように努めた。そして、農民も工業者も商人(彼等は殆ど仏教徒であった)も平和 (āsūda) に暮らせるようにし、この土地 (wilāyāt) がさらに耕作され、(人々が沢山住んで) 繁栄するように心がけた⁴⁾。

というような記述が注目されよう。

また、カーシムは信仰に関しても、特に協力的であった仏教徒に対しては、

(ブラフマナバードの長官は、カーシムは大変協力的であったため特別に寺院の修復が許可された、これはその時のカーシムの上司である総督であり、シリア大守のハジャージュ (650年ころ～714年ころ) 直々の詔勅である。)

ブラフマナバードの尊敬される人 (ānkamuqdim) の願い (iltianās) である、彼等の仏陀の寺院 (imārā t-i-buddah) の修復と彼等の宗教 (mallat) を保障 (namāyān) しなさい。…中略。我々には、彼等の財産 (māl) を奪うことは許されていない。なぜならジォンミー (zimmi) になったものたちの財産を我々の所有 (tasarrafamā) とし、我々が占有 (mutlaq) する (権利を)、われわれは持たないからである。従って、彼等は、彼等の信仰 (kish-i-khwud) を禁止 (man) されたり、迫害 (zajar) されたりされてはならないし、彼等は自らの家で、自らの生活 (zindagani) がなされることが保障されている⁵⁾。

という、インド征服軍の総指揮官であり、カリフ名代でもあった総督ハジャジからの直接の優遇命令が下されている。

IV

なぜ、仏教徒に対してこのような友好的な政策が執られたかに関して『チャチュ・ナーメ』は、仏教徒がイスラーム教徒の進攻に対して、それを歓迎し、闘わずして彼等を都城に導き入れたり、ヒンドゥー教徒の王を追い出し、カーシム軍が闘わずして勝利するように計らったからである、と伝えている。

そのために、カーシムも特に、イスラーム教徒への貢献が大きかった仏教僧バندگان・サーマニーに対して、

私は、(この都城の長官である) バندگان・サーマニー (Bahandarkan sāmani) を重視 (maqaddam) し、(彼を) 完全に信用している。私は、少しもおまえたちへの親切 (‘āṭifit) と保護 (tarbiyat) を惜しむ (darigh) するものではない⁶⁾。

と、その信頼の篤かったことを最高級の表現で表している。

『チャチュ・ナーメ』を見るかぎり、仏教徒は親イスラーム教徒、ヒンドゥー教徒は反イスラーム教徒という構図で理解される。その理由として考えられるのは、七～八世紀においては、この地域にチャチュ王朝というヒンドゥー王朝があり、この王朝が仏教および仏教徒を激しく弾圧し、両者の対立はかなり深刻であったことは、

(バラモン王朝の創始者チャチュ王は) 彼等 (仏教徒で異民族) の主だった長老等 (mi-hitār) を捕らえ、彼等をブラフマナバードの要塞の中に投獄 (mahbūs) し卑しめ (zalil) た⁷⁾。

等という、記述からも推測できる。

当時、この地域の仏教は、反ヒンドゥー勢力として異民族の信仰を得ており、ヒンドゥー教と仏教の対立は異民族間の対立でもあった。だからこそ、仏教徒はイスラーム教徒の進攻に、好意的であったということであろう。以上が、『チャチュ・ナーメ』からの解釈である。七～八世紀の西インドの仏教に関する記述であり、その簡単な解釈である。

V

勿論、イスラーム教徒によって書かれた『チャチュ・ナーメ』を、インド仏教研究史料として用いるには、イスラーム教徒の視点からのさまざまな限界も存在するはずである。これらの点に関しては、考古学資料、インドの諸文献など多方面からの総合的な判断によってそのつど注意深く検討することが肝要であることは論をまたない。というより従来の研究にイスラーム教徒の残した史料を加えるで、より歴史的事実に即した解釈の可能性が高くなるというスタンスで、本史料は用いられるべきものであろう。

- 1) 詳しくは拙論「七～八世紀における西インド仏教の諸相」『麗沢ジャーナル』創刊号, 1992 pp. 22-40を参照。
- 2) A. Kufi, *Chach-nama* (Delhi, 1939) pp. 75-76.
- 3) 拙論「イスラーム史料にみる末期西インド仏教社会とその衰亡過程の考察」『宗教研究』297号 pp. 73-94を参照。
- 4) op. cit., “*Chach nama*” p. 117.
- 5) ibd., p. 213.
- 6) ibd., pp. 117-118.
- 7) ibd., p. 47.

<キーワード> 『チャチュ・ナーメ』, イスラーム史料の仏教研究への活用, 仏教とヒンドゥー教の対立関係

(麗沢大学国際経済学部専任講師)